



吉野熊野国立公園

山、川、海

巡る水が運ぶ生命と文化

国立公園ものがたり



吉野熊野国立公園

山、川、海

巡る水が運ぶ生命と文化

国立公園ものがたり



吉野熊野国立公園と ともに歩む

日本の国立公園は、アメリカなど世界のいくつかの国立公園と異なり、集落や農林水産業などが行われている地域も含めて公園区域に指定していることから、公園内に人々の暮らしや産業があるのが大きな特徴です。そのため、国立公園の管理は、これらの人々の暮らしや産業などとの調整を図りながら、地域の人々とともに進めています。

本誌の舞台である吉野熊野国立公園は、紀伊半島の中央部から南部にかけて位置する国立公園です。標高1500～1900メートルの山々や岩壁が連なり、山腹には自然林が広がる山岳地域、山からの豊富な水を集め、激しい浸食作用によりほぼ全域にわたり深いV字谷となっている河川地域、黒潮などの影響により生息・生育する熱帯性の海洋生物が作り出す色鮮やかな海中景観のほか、リアス海岸や磯浜、海食崖など変化に富んだ景観がみられる海岸地域と三つの地域を有していることが特徴です。また、この公園は熊野修験と熊野信仰という宗教上の聖地を含み、悠久

の歴史と文化を感じることができ
ます。

吉野熊野に暮らす人々はこのように背景によって、国立公園として指定される1000年以上前から自然に対して畏敬の念を抱き、自然とともに生活をしてきました。本誌では、この自然の重要性に気付き、保全活動や自然体験活動などを提供している人々の声を集めました。

『国立公園ものがたり』は、国立公園制度100周年となる2031年にかけて行う「国立公園制度100周年記念事業」の一つとして、日本のすべての国立公園において作成する聞き書き集です。この『国立公園ものがたり』を通して、地域の宝である国立公園の自然、その自然とともに生きてきた人々の歴史、文化、ストーリーを見つめ直し、次の世代、次の100年にしっかりと引き継いでいただけることを願っています。

聞き書き集とは、話し手に自身の生き様を語ってもらい、その人の言葉をそのまま書き起こしてまとめたものです。口調や方言などもそのまま章化することから、読み手は話し手の人柄や感情をリアルに感じ取ることができます。地域の人が紡いできた国立公園のストーリーを、地域の言葉でお楽しみください。

山、川、海 巡る水が運ぶ生命と文化

国立公園ものがたり

目次

- | | | | |
|----|---|----|--|
| 04 | 吉野熊野国立公園
信仰の文化も併せ持つ
紀伊半島の大自然 | 20 | [聞き書き] 森美枝さん
子供の頃から親しんだ水族館で
串本の豊かな海の魅力を発信 |
| 08 | [聞き書き] 伊藤将司さん、山口公佑さん、奥西信介さん
桜の名所 吉野山を次の世代へつなぐ
山桜を育て、守る「桜守」の仕事 | 24 | [聞き書き] 米本恵市さん、大和茂之さん
市民運動で守られる天神崎の自然
ナショナル・トラスト運動先駆けの地 |
| 12 | [聞き書き] 大西かおりさん
大杉谷の自然に触れて畏敬の念を抱く
信念を持って営む大杉谷自然学校 | 28 | [聞き書き] 高木亮英さん
途絶えていた熊野修験を再興
山岳信仰の舞台で修験の精神を伝える |
| 16 | [聞き書き] 谷上嘉一さん、北原潤希さん
熊野川に復活させた三反帆
かつてあった川舟文化を受け継ぐ | | |

吉野熊野国立公園

時に猛威をふるい、時に神秘的で美しい、

紀伊山地の険しい大自然。

この地には多様な動植物が息づき、信仰の精神が宿ります。

吉野熊野国立公園には、そんな貴重な自然環境を

次世代に残そうと奮闘する人たちがいます。

信仰の文化も併せ持つ 紀伊半島の大自然

紀伊半島の中央部にそびえる大峰山脈おおみねの険しい山々、手付かずの原生林や滝に出合える大台ヶ原と大杉谷。岩壁がそり立つ深い溪谷を流れる川。多様な海岸地形が見られ、黒潮の影響を受ける南海。本州最南端に位置し、森・川・海のつながりを感じる吉野熊野国立公園には信仰の歴史もあり、2004年に「紀伊山地の霊場と参詣道」として世界文化遺産に指定されました。また、大台ヶ原など北部の一部地域はユネスコエコパーク(生物圏保存地域)に登録されています。

指定年月日 | 1936年2月1日
面積 | 陸域 61,604 ヘクタール、海域 34,448 ヘクタール
エリア | 三重県 / 奈良県 / 和歌山県

山に降り注ぐ雨が 雄大な川となり、海に注ぐ

紀伊半島の中心部を南北に走る大峰山脈は、名峰が連なる「近畿の屋根」。この大峰山脈を水源とするのが熊野川です。そして大峰山脈の東側には日本有数の多雨地帯、原始的な森林を育む大台ヶ原が広がっています。熊野川の支流、北山川はこの大台ヶ原が水源。山から豊富な水を集めた二つの川が合流し、熊野灘に注ぎ、海の水は水蒸気となり再び山に雨を降らせませす。ひとしずくの水の旅路を追い、その恵みを感じ取れるのが吉野熊野国立公園の大きな特徴です。



山

大峰山脈は近畿最高峰の八経ヶ岳や女人禁制を今も守る山上ヶ岳など、標高約1900メートル～1500メートルの険しい山々が中心。この大峰山脈の北端にあるのが、ヤマザクラの名所、吉野山です。



河川

山岳部を大きく蛇行し、浸食により深いV字谷を形成する熊野川や支流の北山川では、かつて舟で物資や人を運ぶ川舟文化が生活を支えていました。北山川、瀨峡は景勝地としても有名です。



海岸

尾鷲や潮岬周辺のように複雑に入り組んだ海岸もあれば七里御浜海岸のような直線的な海岸も。さまざまな海岸地形を見ることができ、海には温暖な黒潮の影響でサンゴや熱帯魚も生息しています。

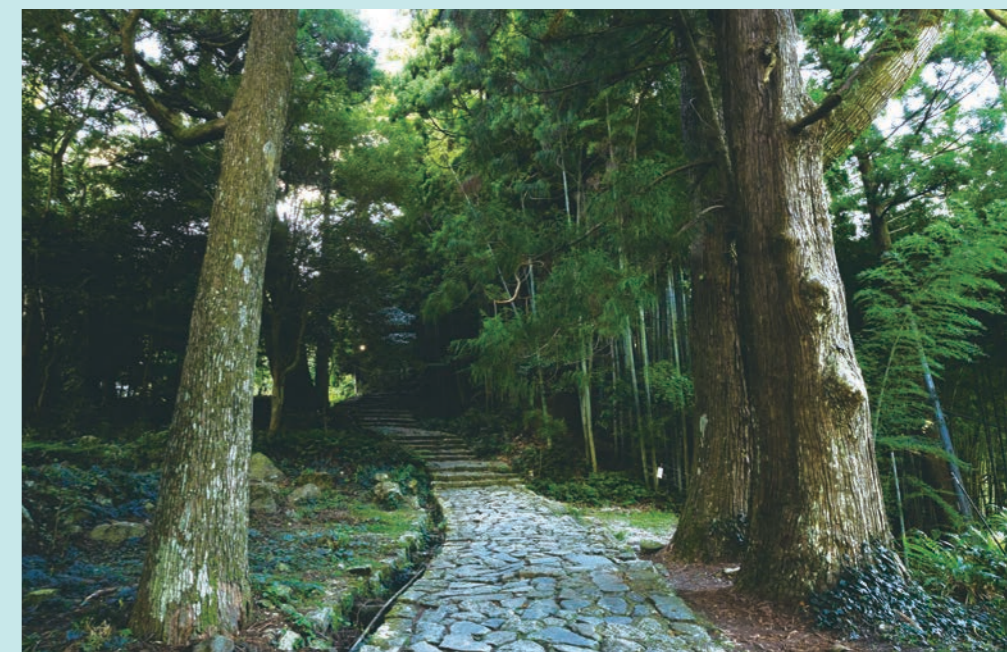


吉野熊野国立公園の特徴

雄大な自然と信仰が密接し、悠久の歴史と文化を育む本地域。各自然の特徴と主なスポットを紹介いたします。

奥深い自然への畏敬が 生み出した祈りの心

大峰山脈ではおよそ1300年前から、山岳信仰と密教や陰陽道が結びついた修験道の厳しい修行が行われていました。さらに、平安後期からは那智大滝を御神体とする熊野那智大社、熊野川の中洲にあった熊野本宮大社、熊野川河口の熊野速玉大社という熊野三山を中心とする熊野信仰がブームとなり、「熊野詣」は上皇や貴族、そして庶民にまで浸透。かつての熊野三山への参詣道は熊野古道と呼ばれ、世界中の人が訪れています。



- 一般道
- 高規格道路
- 紀勢本線
- 近鉄吉野線
- 国立公園区域(陸域)
- 国立公園区域(海域)

※国土地理院地図を元に加工



山桜に彩られた春の吉野山。 写真提供／吉野山保勝会

聞き書き

伊藤将司さん、山口公佑さん、奥西信介さん

桜の名所 吉野山を次の世代へつなぐ 山桜を育て、守る「桜守」の仕事



桜守として吉野山に集まった3人

伊藤 僕は生まれも育ちも吉野です。ここでは小学校の間、だいたい5月末から6月にかけて、桜の種拾いをするんです。僕が小学生の頃は「牛乳瓶2本分」っていうノルマがあって、それを全校生徒みんなが家の近所とか公園で集めてくる。種は桜の下に行ったら落ちてるんですけど、5ミリメートルとかで小さいんでね、けっこう大変でした。拾った種は果肉取りをして、種植えて、育てた苗を6年生の卒業記念で吉野山に植えに行くというのが流れてました。

桜守は、保勝会の理事の方に誘われたんです。理事の息子とよく一緒に遊んだりして家にも行ってたんで、その時に声をかけられて。その時は仕事をしてたんですけど、地元でなにか違う仕事ができたらいいなと考えていて、桜守の仕事は先代が草刈りとか伐採とか仕事をしてるところを見ていたので知っていたし、これはもしかしたら良いタイミングかもしれないなと思って、すぐにやろうと決めました。

もともと吉野山は山仕事をする方がいっぱいいたんで、桜の管理も昔は今みたいに企業的な感じじゃなくて「俺こをやったからお金ちょうだい」と、そういう形でいろんな方が関わっていた。そうやってこの吉野山って守られてきたと思うんですけど、山仕事をする方もだんだん少なくなってきたんで、吉野山保勝会が桜守という専属を決めたんだと思います。僕が入ったときは先代の桜守がいて、65歳と80歳の方がやっていた。僕が80歳の方と入れ替わりで入った後も、何人か桜守を採用しようというところでハローワークにも求人を出して、それで二人が入ってきました。

奥西 僕は隣の大和高田市の出身で今も暮らしているんですが、20歳から13年くらい造園の仕事をしてきました。もともと父親が造園業でして、僕も造園の仕事に就いて公園や家の庭の手入れとか設計とかをやっていました。そこでは桜はそんなに扱ってなかったんですけど、僕が行った造園屋に桜守の先代がたまに応援で来てくれてたらしいんです。僕はそのときに直接会ってはいないんですけど、

ど、周りの人から話を聞いていたので、桜守の仕事もなんとなく知ってはいました。この業界では、桜守というのはちょっと一つ上の存在でしたね。桜だけを見るっていうのがやっぱりプロフェッショナルというか。ハローワークで桜守の求人を見つけたんですけど、挑戦してみようかなという感じで応募しました。

山口 僕が入ったのは、奥西くんの半年くらい後かな。宇陀市が地元で、今もそこら通っています。ここから車で1時間くらいの距離のところですね。大学は農学部で微生物の研究なんかをやっていて、それを生かして企業に就職したんですけど、工場で夜勤もあって子供が生まれてちょっと大変だったんで、その機会に転職を考えるようになりました。それで桜守の求人を見つけて応募したんです。

厳しい仕事のなかにある喜び

伊藤 吉野の桜は7割が山桜なんです。ソメイヨシノってよく聞かれますが、ソメイヨシノは全部クローンなんでDNAが全部一緒です。接ぎ木とか挿し木で増やしていくんですけど、山桜は野生種なので種から育てるんです。

奥西 以前働いていたところでは、病気になるから桜は切っちゃって教わってたんですけど、今は切ってもすぐ炭とか塗ったら大丈夫って感じですね。
山口 切り口がそのままだと水とか虫とか

1300年の歴史を誇る日本有数の桜の名所、吉野山。平安中期から桜が植えられ、今では春になると約3万本の桜が咲き誇ります。たくさんの人を魅了してきたこの吉野山の桜を維持するために、桜の種拾いから、種植え、植樹、草刈りなど、一年を通して桜の手入れを行っているのが「桜守」と呼ばれる専門職の人たち。吉野山の保全を行う吉野山保勝会で桜守の仕事に就いた3人が、変化する環境のなかで吉野山の桜を次の世代につなごうと奮闘しています。

やまぐち・こうすけ／公益財団法人「吉野山保勝会」桜守。1978年、奈良県宇陀市に生まれる。近畿大学農学部で微生物を研究。夜勤のある仕事をするなかで、子供が生まれたことをきっかけに2015年に転職、桜守の道へ。子供にきれいな桜を見せたいと力を注ぐ。

いとう・しょうじ／公益財団法人「吉野山保勝会」桜守。1987年、奈良県吉野郡吉野町に生まれ、吉野山の桜を間近に見て育つ。2014年に保勝会の理事から誘われ、地元に貢献できる仕事に魅力を感じ、桜守となる。桜の成長を見るのが楽しみの一つ。

おくにしんすけ／公益財団法人「吉野山保勝会」桜守。1983年、奈良県大和高田市に生まれる。造園業で13年働いたのち、2015年から桜守に。造園業で培った知識と経験を生かしながら、吉野山の山桜を守るために経験を重ねている。



吉野山に2本ある母樹のうちの1本。母樹から種を採取する。

入ったりするので、炭は防腐剤がわりに塗っているんです。

伊藤 ソメイヨシノのほうが、病気になりやすいというのはあるかもしれない。山桜はね、一本一本、それぞれ違うんです。山桜の管理でいうと、まず種から育てるので、「母樹」といって、種を集める木を決めているんです。母樹と決めるにはいろいろ条件があって、周りが山桜で覆われてほかの品種が少ないところを選んでいます。山桜は自家受精せずに周りの花粉で受精するんで、なるべく混ざりのないところで、かつ種を拾いやすいところっていうのを2ヶ所決めてます。あんまり範囲を広げすぎてもね、いろんなところに種を拾いに行かなくなっちゃうんで。あとは樹勢が良くて実成りの良い大きい桜というのも選ぶときの条件ですね。

6月頭に種を拾って、その種を冬の2月くらいに蒔いて、3ヶ月後の5月ごろには芽が出ます。それで苗がある程度大きくなったら



山桜が咲くと、赤茶色、白、薄ピンク…さまざまな色が混ざり合う。写真提供/吉野山保勝会



(左から) 山口さん、伊藤さん、奥西さん。息の合った3人が桜を守る。

植樹します。植樹は全体をバツと見て「ぼつかり空いてるな」ってところに植えるんですけど、そのあたりは感覚ですね。古木も多いので、枯れた桜の更新木として植えたりもしています。山桜の特徴として、上に上に伸びて大きくなるんですよ。ソメイヨシノとか園芸種はわりかし横に広がるんですけど。上に伸びてくれるんで、ちょっとしたスペースがあれば大きくなります。

この仕事はどうしても山での仕事なんで、傾斜がきつくて草刈りとかは大変なんですけど、やったらね、きれいにもなるし、自分が手入れしてる桜が世界遺産の中にあつて、いろんな方が喜んでくれるという意味ではやりがいがありますね。植樹した桜が大きく成長していくのを見るのも楽しみです。

奥西 僕は自分らが管理しているのをほかの人が見てくれて「きれいやな」と言われる

いつてたのが、最近ちょっと下と中が同じくらいに咲いたりとか、温暖化のせいやと思うんですけど、下から順番っていうよりは、暑さに気付いた奴らが先咲いてるっていう、ぱらつきは出てきてるよね。

種の発芽も変わってきました。今までは種を植えたら毎年発芽してたんですけど、種の出来具合が最近では変わってきて、2年に1回しっかりと熟してできるけど、翌年は種が青い

のがうれしかな。夏の昼間の草刈りは暑いし、急な降り面とか崖みたいなどころもあるんで危なかったりもしますけど、そういうやりがいか、桜が成長する楽しみがあるからできてるっていうところもあります。

山口 吉野の桜がテレビで映ったりすると、知り合いや近所の人が見て「あそこの桜いいよね」と声をかけてもらったりするのもやりがいありますね。それ以外のときはほとんどの人、知らないというか、吉野には来られないんですけど。春のシーズンになったら友達から「行きたいねんけど、どこ見たらいい？」とか聞かれて。吉野山に来てもらうきっかけに携わっていることはうれしいですよ。あと山桜の若葉は、咲いたときに、赤、黄色、緑、いろんな色が混じって、山を華やかにする。それが一番好きです。ソメイヨシノってピンク1色とか白っぽい色やったんですけど、吉野の山桜は、きれいな、見たことがない色ですね。そういうところが見て感動しました。

伊藤 DNAが違う山桜だからこんだけ、色とりどりになるんだと思います。

奥西 いつも桜の時期になると、僕ら人があんなまりないところに行つて作業するんです。そこってなんか特別で、一年に数回、桜吹雪を見ながら昼のご飯を食べられる。それはモチベーションになるかもしれない。あと、ここは町の人も優しくして良い人たちがばかりなんです。だから10年通つてこれらるっていうのもあるかもしれないですね。

ままで落ちたりとか…そんな年でも種を植えてたんですけど、やっぱり発芽率が悪いんですよ。不作のなかで苗をどうやって作るかという問題が出てきたんです。

山口 そう、それで種を1回、保存してみよつかみたいな話になって。でも、最初、出さへんかったよな。

伊藤 それを途中から土中保存に変えてみたら、1年寝かせても発芽率に問題がないっていうのがわかってきたんで。良かった年の種を保存しておいて、1年越しで植えるようになりました。なので発芽の問題は今後減ってくるかなとは思ってます。

山口 最近はそのやっつて、その都度やり方を変えています。

伊藤 やつてみて良かったら採用、みたいな環境が変わっていくなかで、いろんなところから新しい手法を学んだりして、バリエーションを増やしていくのが大事かなと思います。今はできて何年後かにはそれは通用しない、そういうパターンもありますし、今はできないけど、あのときやったやつ、次いけるかもしれないという面はまだあります。常に更新ですね。

奥西 自然と植物が相手なんで、やっぱり正解っていうのがわからない。試行錯誤ですね。強い桜とかを作っていくのがね、使命かなと思います。答えはすぐ出ないんですけど、なにかしないと変わらないと思います。

山口 自分の孫、生まれるか生まれへんかわからないけど、孫の代でこの桜が残っている



夏場の作業。桜が育ちやすい環境を作るため土壌に手を入れる。

吉野山の桜を守る技術をつないでいく

山口 桜守をやってるなかで、やっぱり環境の変化を実感することはありますね。たとえばシカは僕がここに来たときよりも断然増えましたね。草刈りしても気にせず寄ってくるし、それはちょっと怖い。

伊藤 猟師も減ってますし、シカが増える数に対して追いつかないんでしょうね。

山口 シカは桜の若木とか食べるんです。伊藤 角で幹も傷つけられるし。シカの対策は、基本的になるべく木を折られないような大きさを育てて植えるっていうのと、小さな若木は囲いをするとか、あとは傷つけられたら麻布を巻いて、傷がそれ以上広がらない

ようにすることですかね。後手に回ってる部分はありますけど。シカはどういう動きするかもわからないんでね。今年は大丈夫だったけど、次の年は傷つけられてるってパターンもありますし、草刈りしながら異常がないとか、常に見ています。

あとは変化でいうと夏の夕立が減ってゲリラ豪雨に変わったことですね。昔だと夕立とかね、3時か4時くらいになってちよつとパラパラ降ったりして、定期的に適度な水分補給できたと思うんですけど、最近はずつと降らん期間があつて、急にゲリラ豪雨みたいな雨が降ってきて、あんまり良くないと思うんですよ。桜の開花も、吉野は下千本・中千本・上千本・奥千本と言われていて、山の高低差で気温が変わるから下から徐々に咲いて

ようにしていきたいと思えますね。

伊藤 吉野の桜は1300年続いているって言われているのに、僕らの代で途絶えるっていうのはね、したくはないんで。今の1300年が1500年、2000年って続くようにいろいろ伝えていくっていうのが僕らの仕事でもあるかなとは思ってます。仕事を次の世代に引き継ぐという意味ではやっぱりね、まづ桜を間近で見ってもらうのが一番いいかなと思うんですよ。小学生と記念植樹をするときに教えたりもしてますけど、自分が手入れした桜を見て、頑張ったらこんな感じに咲いてくれたんやなってなつたら、好きになつてくるかなと思うんですけどね。

奥西 イベントとかボランティアでたまに子供たちが来てくれるんですけど、その子らに次どうや、みたいな(笑)。その子らに教えていくのも大事かなと思いますね。

山口 あとは次の人がやりやすいように、僕ら3人で考えてやっていくことが一番かな、次の世代に向けても。

伊藤 次の世代って難しいね。

山口 まだいいひんからね。横にいたら、また考え方も変わるやろうけど。

伊藤 桜の管理についてはいろんなレジエンドと言われるような人がいてるんで、そういう人に比べてまだまだかなと思います。目指したいところはね、桜に関することやつたらあいつらに聞いてもらつたら大丈夫っていうところまでいけたらいいかなとは思いますが。まず、そういう存在になりたいですね。



吉野山を一望できる花矢倉展望台からの眺め。満開の時期には桜が植えられている場所が美しく染まる。



大杉谷自然学校が主催する子供向けプログラム。川遊びや飛び込みなど、大杉谷の自然を体感。写真提供/大杉谷自然学校

でどういことや」という地域の声もあったと思うんですね。それで廃校後も変わらずに子供たちの声が聞こえるような場所にしていきましようということ、自然学校が選ばれたんだと思います。2001年3月までは北海道で養成講座を受け、2001年4月にこの場所で自然学校を開校しました。トントン拍子といえ、本当にトントン拍子ですよ。

自然学校養成講座で学んだことは今もすごく生きています。自然学校は仕事なので経営っていうものと表裏一体なんです。それまではたとえばボランティアで子供たちに自然体験を提供する団体はたくさんありましたが、今はそういった団体はほとんど解散していると思います。やはり、経営として成り立つ組織でないと続かない。そしてもう一つ重要なことはNPO、非営利活動として成り立たせるということ。社会貢献をしながらも稼ぐのは、当時としてはものすごく新しい考え方だったと思います。

あらがえない自然の脅威 畏敬と祈りの気持ちが社会を変える

大杉谷には今、ダムが2ヶ所あります。このダム問題は大きくて、今も川がきれいっていう方が多いんですけど、私たち「ジモティー」からしてみれば、川は汚くなったなと思います。ダムというのは功罪、良いこともあれば悪いこともあるわけですよ。ダムは2ヶ所あり、1957年と1966年にできましたが、この影響で上流域では、たとえばアユなど絶滅した

おそらくこれは太古から繰り返されてきたものです。大雨の深層崩壊においては、自然林であろうが人工林であろうが関係ない。これは自然現象です。私たちが国立公園の特別な景観を目にすることができるのは、自然現象の産物であるということなんです。

人間の力はものすごく小さい。それを昔からわかってきたのが、この地域の方たちだと思います。自然とともに暮らしていた人たちはものすごく謙虚であるし、思慮深い。これは自然と向き合ってきたからなんだろうなというのが、災害を経て、私の中で腑に落ちましたね。

今、自然学校の新しいテーマとして取り組んでいることが精神文化としての信仰です。大台町には伊勢から熊野をつなぐ熊野古道伊勢路が通っていますが、4年ほど前からこの巡礼旅を復活させる活動を始めたんですね。



大杉谷自然学校の教室で話す大西かおりさん。

全員が都市に住むっていうことも、もちろんできるかもしれません。しかし私はね、それは良いことだと思いませんよ。自然の中にまず行って、自然のことをよく知り、自然を守っていく人を育てる必要がある。自分ではいかんともしがたい存在として自然があり、祈りの気持ちを持って常に謙虚になる。それは、ぎくしゃくした人間関係を改善し、より良い社会づくりにつながると思っています。

魚もいます。水っていうのは大地の血液なんです。ダムがあるっていうのは血柱的なものがそこにあるということ、いくら水を流しても美しい川を取り戻せないですよ。

私たちはダムができる前に子供時代を送った方への聞き取りもしていますが、武勇伝がいっぱいあるんです。川の深さが10メートル以上ある所に白い石をぽつと落とすと、川がどこまでも透明で石が見えていたとか、この地域には「しゃくり」というアユをとる伝統漁法があるのですが、1日に700匹、800匹もとれたとか、アユが遡上してきたときに川の中を見たら、……そのくらい豊かな川だったんです。その豊かさ引き換えに電力を得て、そして高度経済成長期の礎になっているということも言えるんです。

2004年に宮川で豪雨災害があったんです。この地域も死者・行方不明者が7名いて私の同級生の家族も亡くされました。今こそ豪雨災害は珍しくないと思うんですけど、当時はいろんな研究者の方が入ってきてね。地域の方もこんな大災害は見たことがないと。私も本当になんでこんなことが起こったんだろうと思っただんです。土石流や山腹崩壊が起きたのは植林が原因なんじゃないかとも言われました。けれど、いろいろと調べていくと、このV字渓谷を形成してきたのは、太古から繰り返されてきた災害の力なんです。災害によって崩れ続けて、そして大杉谷っていう谷が生まれてきたんですよ。人間って寿命がせいぜい100年しかない



国の天然記念物に指定されている淡水魚、ネコギギ。写真提供/大杉谷自然学校

生き物で、3世代合わせてもどうでしょう、200年くらいしかない。だから、そういった人間の測る尺度で見れば「災害」かもしれない。けれども自然の中では当たり前のことなんです。すよね。

それがどうしてわかるかっていうと、たとえば私たちは淡水魚のネコギギの調査を継続していますが、実は、災害を挟んでネコギギの個体数はV字回復しているんです。熊野で大災害があった2011年も個体数はV字回復しました。災害によって河川が大きく攪乱されると空間ができます。その空間に隠れたり、そこにいるものを食べたりと、多様性のある豊かな環境が生まれるんです。ですが、攪乱がなくなると、隠れ家もない、餌もない状態に陥ってしまうということなんです。ネコギギは災害に強い。いやむしろ災害が好きとも言える。災害がないと増えないんです。



深い溪谷が続く大杉谷。大台ヶ原まで登山道が整備され、雄大な滝を眺めることができる。

聞き書き
谷上嘉一さん、北原潤希さん

熊野川に復活させた三反帆 かつてあった川舟文化を受け継ぐ



紀伊半島南部、和歌山と三重の県境を流れる熊野川。ここはかつてたくさんの川舟が行き交っていました。平安時代には熊野詣の参詣者を乗せ、そして1950年代ごろまでは対岸に渡る人や物資も乗せて。時代とともに川舟は消えていきましたが、熊野川流域で育った谷上嘉一さんは、伝統的な川舟である三反帆を自ら作り、熊野川を巡るツアー「熊野川体感塾」を始めました。2021年には東京から移住した北原潤希さんも加わり、熊野川の歴史と川舟文化を継承しています。

たにがみ・よしかず／「熊野川体感塾」代表。1942年生まれ。3歳から三重県紀宝町の熊野川流域で育ち、生活の道具として川舟に親しむ。製紙会社に就職後、独学で川舟づくりを始める。定年退職後、2007年に熊野川体感塾を立ち上げ、文化として途絶えていた三反帆を製作。熊野速玉大社の御船祭(みふねまつり)で使う舟も手掛ける。熊野川流域で唯一の川舟大工。

きたはら・じゅんき／「熊野川体感塾」船頭。1992年生まれ。埼玉県さいたま市出身。早稲田大学卒業後、都内の金融関係の会社などで働く。2021年に紀宝町へ移住。地域おこし協力隊として熊野川体感塾で運営業務に携わる。2025年に協力隊の任期を終え、現在は体感塾の運営や川舟乗船ツアーのガイドを担う。

生活に欠かせなかった川舟

谷上 昔から熊野川は暴れ川と言われて、大雨が降ると増水してね。ここは熊野川の下流域ですけど、上流の大台ヶ原の大きな山岳地帯の雨水なんかもここまで流れてくるんですよ。200キロほどの川なんですけどね。私は3歳から熊野川沿いで暮らしてきましたけど、子供の頃から、しょっちゅう増水してね。今と比べると台風なんかも多かったんですけどね。この辺は台風銀座だとか言われてね、そんなときにまた魚も結構とれたんですよ。台風のさなかでも魚をとりに行くことがありましたね。親に怒られながらね(笑)。

昔は家に必ず舟が一艘以上はありましたね。舟の用途っていうのは多岐にわたってましてね。物資を運搬したり、人を運んだり、あとは漁に

使ったり。川にはアユとかウナギがいて、たとえばアユとりなんかでもね、産卵のために下流にきたアユを針で引っ掛けて釣るんです。私も一晩で100キロは釣って、結構金にはなってますよ。シーズンになると、ここまで仲買のおばさん連中が来るんです。おばさんたちに仲買いされたアユはお寿司にしたり、料理屋に売りに行ったり。私の家の前あたりにアユ釣りの屋形船が100艘くらい並んだんですよ。本当に壮観でしたね。

子供の頃から川は友達だったですね。夏休みなんかは一日中、川で遊んだ。昔の子供は小学校の3年生くらいには一人で舟に乗ってましたね。漕ぎ方ですか？ 誰かに教わったんかもしれないですけども、そういう記憶は全然ないですね。学校の友達や先輩とかも一緒に舟でしょっちゅう遊んでたからね。舟を操ることも遊びながら身につけていったんでしょうかね。

筏も常時、川を流れていました。ここから川を3キロメートルくらい下ると和歌山県側に新宮の町があって、上流で切り倒した大木を筏で新宮に運んでた。学校が終わったらその筏に乗せてもらって家の近くで降りたりすることもあったね。歩かんでいいから楽ちんですよね(笑)。

お袋を乗せて舟を漕いでそこら辺に運ぶようなこともありましたし、上流で田んぼを作っている人が刈った稲を舟で運んでくれんかというところで、稲を下流にある家まで運んだこともありませぬ。今の車とまったく一緒やね。

舟は毎日使うものやから、丁寧に扱ってまし

たよね。一日の終わりに水をかけてきれいに洗って河原に引き上げておいて、一晩乾かした。

渡守のバイトもしたね。渡し舟に人を乗せて漕ぐんです。「乙基の渡し」という1000年前からある渡し場があったし、今の熊野大橋の近くには「成川の渡し」もあった。渡し舟が川を横断して三重県と和歌山県を結んでたわけですよ。

昔は熊野川に沿って川丈街道という熊野古道があったんです。熊野速玉大社でお参りをして、次に本宮大社に行こうかという人は、渡し舟で三重県側に渡って、本宮大社を目指して川丈街道をひたすら歩かれた。川丈街道は道路工事で舗装されて、今は古道そのものがなくなっちゃったね。

渡し舟にはヤギとかウシとか、家畜も結構乗せたね。たまにウシが暴れて舟に乗せれんときもあって、ウシは泳ぐからそういうときには泳いでもらってね。

渡し舟の運賃は、住民はタダだったり、5円、10円の時もあったね。今でいうと、パン1個ぐらいの値段やっただね。一艘でいたい10人くらい乗れる。団体さんなんか来たらすごいお金になるときもありました。朝から夕方まで渡し場待って、人が見えたら迎えに行く。冬の寒かったときはえらかったね。渡守が待機する小屋もあってね、そこで火を焚いて暖をとった。私は紀宝町の製紙会社に就職したんですけど、当時は汽車通勤の人も結構いて、新宮駅で降りてから池田の渡しで川を渡って、会社に行く人もいたね。



体感塾には、三反帆が生活に欠かせなかった時代の写真が保管されている。

昭和30年代までは、三反帆も川を行き来して使われていた川舟で、反物を三つ使うから、三反帆。ここは天気が良ければ、早朝は山から海に向かって風が吹く。山のほうが空気が冷たいからね。それで午後は気流が変わって海から山に向かって風が吹くんです。三反帆は帆を3枚立てて、その風を上手に使って進む。三反帆が途絶えたのは、エンジンが出てきたということですね。エンジンで舟を動かすようになったから、必然的にいらなくなった。私はおそらく三反帆を使っていた最後でしょうね。

独学で始めた川舟づくり 三反帆の復活へ

谷上 初めて自分で舟を作ったのは、もう45年くらい前かなあ。30代の頃とか。舟には愛着があったから、自分で自分の乗る舟を一回作ってみようと思ったんです。当時、船大工はこの



風を受けて進む三反帆。北原さんが舵をとる。

辺にまだたくさんいましたよ。この界限でも10人以上はいましたからね。経験はなかったけど、生活そのものを川舟に頼っていたのが、いろんな知識になってたかもしれないですね。

舟はスギとかヒノキ、ケヤキやカシの木を使います。熊野で育った木材です。スギは100年以上の大きなものを使うんです。この辺はみんな自家用の舟を持ってたんで、舟用に大きな材木を育てておいたんですよ。うちも何本も置いてたんで、それを切って舟にしたんですけどね。

木工の仕事はね、子供の頃からやっぱり関心があったんですね。それは私だけじゃないと思うけどね。昔は遊び道具なんかないから家の材木で遊ぶものを作った。自分で考えてね、ソリに車輪をつけて坂を下って遊んだんです。コンクリで舗装なんかしてないからね、滑らすと草がなくなると雨降ったら土が流れるって、よくいいさんに怒られたですね。

昔はエンジンがなかったから、舟は形が良く



熊野川に浮かぶ御船島。熊野速玉大社の例大祭、御船祭の祭礼の場でもある。

ないと安定して走らないんです。川の流力が激しくても操舵できるように反り上がった形にしないといけない。最初に作った舟は自分ではあまり気に入ってなかったけど、何年も乗りましたよ。

私の舟を近所の人が気に入ったみたいで、「俺にも作れ」と言うようになって。たぶん、あいつに作ってもらったら安く上がるぞっていう発想やったと思うけど(笑)。

定年の頃には御船祭で使う舟も作りました。御船祭は1000年以上前からある祭りで、一説によると1400年くらい続いていると言われていますね。私はずっと熊野速玉大社の御船祭の舟に乗ってたんです。御船祭では熊野川の御船島の周りを舟で3周して速さを競う。私が子供の頃はすぐく賑わったね。今はいろんな行事が多様化していったね、お祭りの本番でもギャラリいなんか非常に少ないですけど、昔はすごかったですね。地域ぐるみでね、祭りの日は学校なんかも休みでしたしね。

御船祭で使う舟は9艘あるんですけど、全部私で作りました。普段作るものとは形状はだいぶ違いましたが、現物を見れば違いはわかるしね。定年まではサラリーマンをしながら主に土日舟を作って、それで気付いたら船大工になつたというわけです。

体感塾は定年してから始めたから、ざっと20年前やね。やっぱり昔は賑やかで子供たちもたくさんいたけども、人口が減ってしまつて限界集落に近くなつてきたから、操船のできる仲間同士でなんとか舟で地域おこしができないのか



谷上さんが舟を作っている工房。

などと思って。皆それぞれ自分の舟を大事に持ってた人たちやったからね。

体感塾を始めたらメディアの反応がすごくてね。ドキュメンタリー番組も組んでくれましたし、最初からそこそこお客さんが来てましたよ。少しは観光の拠点になったかなと思ってるけどね。

国立公園は90年ですか。ここは、国立公園だからみだりに手を入れたらいかんという、そんなことはずっと聞いてきましたね。自然環境は日本一やなと思ってるんですけどね、そのかわりみだりに手を入れてはいかんとかいう、不便さも日本一かなと思ってる。

私はね、川舟に愛着をずっと持ちつづけてたんでね、そういつた面ではね、こんなこと今言っても始まらないんですけど……上流にダムがたたくんでて川が濁って死んだようになってしまったのがもう、一番つらいことですよ。

ダムができて50年ですね。ダムができたときはね、こころの住民たちは3年間だけ辛抱してください、3年たつたらまた環境が良くなつ

地域おこし協力隊として東京から移住、川舟文化を継承していく

北原 ここに来て4年半ぐらいです。僕は都市部育ちで、自然とのふれあいといたら、夏休みに家族でキャンプに行くみたいな、本当にのくらしいしかなかったですね。東京で仕事をしてたんですけど、漠然とここ最近の暑さとかも含めて環境はこのままでいいんだろうかという思いもあって、田舎暮らしに興味を持つようになったんです。

情報を集めるなかで、紀宝町の役場と谷上さんが地域おこし協力隊を募集していることを知りました。ホームページに三反帆の写真が載ってて、なんかそれに惹かれて。どうしようかなって迷いもありましたけど、ちょうどコロナが流行したのが、ある意味最後のひと押しになったというか……ちょっと都市部では暮らしぶらないなと思うようになったので、ここに来ることを決めました。

最初は紀宝町役場の方が住む場所から面倒を見てくれたし、もちろん谷上さんも役場と一緒にいろいろ協力してくださって。やっぱりここでの暮らしは人とのつながりが大事というか、面倒を見てくれる方が多い。都会だったら近所のつながりも少ないし、困ってる人がいたら手を差し伸べるとか、そういう文化は都会とは全然違うのかなと思います。

最初は谷上さんと一緒に舟に乗って、それから一人で舟を操縦する練習をして、3年くらいたつてお客さんに乗せられるようになりました。



工房には、自分で作った工具をはじめ、たくさんの工具や素材が並ぶ。

て元のきれいな川に戻りますって言われたんです。アホやから信じてしまったよ。そんなこと1回もなかったですよ。年を重ねるとんびに悪くなってね……川の生き物が激減していったしね。アユなんか間違いなく100分の1以下になってしまったし。汚濁対策みたいなことはいろいろお金も使ってやってはきたんですけどね、なかなか効果は表れないですよ。

熊野川も世界遺産ですし、歴史や景観、あるいは川舟文化、熊野速玉大社のお祭りなんかも含めてね、やっぱり守っていかないとダメですからね。舟づくりも手伝ってくれる人が二人いるんやけど、なんとか作れるようになってくれたいかな。

今も船頭をやりますけど、あと何年この体感塾をやるかわからんですよ。だから体感塾に来てくれた北原君に期待するところ大ですね。いろんな形で発信しながら継承してもらえればと思っています。北原君と一緒に活動してくれる仲間もね、これから増やしていってもらえるとありがたいですね。

操船はやっぱり川の流れもあるし、風を読む必要もあるし、最初はそのあたりの感覚が全然わからなかったですね。台風とか日頃から心配なことはありますけど、晴れている日などコンディションが良いときは気持ちが良いですよ。これでお客さんに喜んでもらえて、お金がもらえるなら最高だな(笑)。

協力隊も任期が終わったので、これからは体感塾の運営を中心に行っています。ここに残ろうと思った理由ですか？ さすがに協力隊が終わってすぐ帰る気にはならなかったです。やっぱり川舟文化の継承は3年やそこらでできるようなものではまったくないので、これどうやうスタート地点に立ったというくらいのものでしょうか。こういう取材のときに谷上さんのそばで話を聞いて、できるだけ地域の歴史や文化を蓄積して、お客さんにも伝えていきたいと思っています。



ちょうど50歳差の二人。協力し合い、体感塾を続けている。



谷上さんと北原さんの好きな場所、畳石。畳を斜めに立てかけているように見える岩壁は、壮大な眺め。

聞き書き
森美枝さん

子供の頃から親しんだ水族館で 串本の豊かな海の魅力を発信



ウミガメに熱帯魚、サンゴやサメ……紀伊半島の南端、串本の海は暖流の黒潮の影響を受け多彩な生き物が息しています。そんな串本の海について楽しく学べる場所が、海域公園地区に隣接する串本海中公園の水族館です。海域公園地区とは、国立公園や国定公園内の海の景観を守るために指定された場所で、串本海中公園はその第1号。幼い頃からこの水族館に通ってきた森美枝館長は、串本の海を再現した展示や体験イベントを通して、串本の海の魅力を伝えています。

もり・みえ／「串本海中公園水族館」館長。和歌山県新宮市出身。幼少期から海の生き物に興味を持ち、近畿大学農学部水産学科在学中に串本海中公園水族館で実習を受ける。1990年に大学を卒業し、同水族館に就職。展示の装飾や生き物の解説、串本の海の研究活動のほか、展示する生き物の採取のため自ら海に潜ることも。2018年、館長に就任。串本の豊かな海を体験できる場所づくりを目指している。

海の生き物に惹かれて 水族館の飼育員へ

物心ついたときから、本当に生き物が好きでした。虫取りに行ったり、田んぼにおたまじゃくしをすくに行ったり。家でもインコを2羽飼っていました。生き物のどこに惹かれていたか……変わった形や色に興味があったんでしょうね。海の生き物の図鑑もよく見ていました。クラゲなど陸上には絶対いないような変わった形をしているものが好きでしたね。

小さい頃は本当に休みになるたびに、しょっちゅう串本に遊びに来ていました。私は出身が新宮市ですが、串本にいとこの家があったんです。この海中公園にも来ていましたね。当時の様子は覚えていますが、まずね、それまでよく行っていた水族館は、どっちかっていうとちよつと館内が暗くて、洞窟のようなイメージがあったんですけど、海中公園の水族館は入ったときに明るかったですよね。すごく水槽が明るくて。開放的な水族館だなと思いました。

海の生き物について勉強したい、研究したいという気持ちが強かったので、近畿大学の水産学科に入りました。やっぱり大学では海の生き物に関する授業が多かったので楽しかったですね。サークルも水産実理研究会といって、魚好きの人が集まるようなところで。だから結構ね、この業界にサークルの先輩が何人かいますね。

海中公園水族館には学生時代から、もう入り浸ってました。実家に帰ってきては、ここに遊びに来たり、実習に来たりして。今でこそ、長

期の休みになるとうちに学生さんがたくさん実習に来ますけど、当時はそういうことは珍しかったです。こちらから実習させていただきいってお願いして、入れてもらっていました。

海中公園水族館の実習では、海に出て水槽に入れるサメを集める手伝いをしたこともありましたが、400メートルくらいのロープが何本もあって、ロープを手で引張って手練っていくんです。やっているうちにロープで手が擦れてきちゃうんですよ。でも、ちょうど海が荒れだしてきたので、もうやめるわけにはいかない。雨も降ってくるなか、ひたすら手練ってましたね。その姿を見て、「あ、こいつは根性もあるな」って思ってもらえたようで、それで水族館に呼んでもらったっていうのもあるみたいです。後から聞いた話ですが。

就職は、海の生き物に関係する仕事ができる

ならどこでもいいとは思ってんですけど、やっぱり水族館に行きたいなと思っていましたね。イルカのショーのトレーナーだったら空きがあるよっていうことも言われたんですけど、私はショーに出たいというのはなくて。研究や飼育をしたかったです。

大学卒業の年、ちょうど海中公園にダイビングパークという事業部ができて、もともといた水族館の飼育スタッフが1人そちらに異動することになりました。1人空きができて「入る気があるんだったら入るか」と職員さんに声をかけてもらって。すごく運も良かったんですけど、働けることになってうれしかったのを覚えてい

ます。働きはじめたとき、飼育員は全員男性で女性はいませんでした。当時はこういう水族館の飼育員になりたいという女の人も少なかったんです。飼育員は力仕事です。しかも水産学科がほとんど男性で、学生は100人ぐらいいますが、その中で女性って最終的には何人かな、本当に片手で数えるくらいしかいなかったんです。

当時の館長さんにも「女性はいらない」と言われましたが、ほかの職員さんが「これからの時代は女性の視点も大事だ」「体力もあるから大丈夫」と後押ししてくれたんです。大学のゼミの先生も館長さんを説得してくれました。当時はね、やっぱり女性を入れてもすぐに結婚して辞めてしまうこともあるし、こういう仕事は特殊じゃないですか。長く続けたいと経験が身につかないことがあるので、そういう意味では



展示水槽の裏側にあるバックヤード。
ウミガメなどさまざまな生き物の飼育も行う。

採用するほうも不安だったと思います。ただ、私は入って嫌だと思ったことは一度もないんですよ。いろんな人に支えてもらって、やっぱり女性だということ周りのスタッフはすごく気を遣ってくれたと思います。

体力的にきついことは結構ありました。当たり前ですけど、ほかの職員さんはみんなエキスパートで、すごく知識もあるし、海に潜る技術もある。ついていかなきゃっていうプレッシャーはすごいありましたね。

私、子供のときに溺れた経験があって、ちょっと水恐怖症なところがあったんですよ。ただ、ここで働くには海での潜水訓練をクリアしないといけない。初めて海に深く潜ったときは、最初はちょっと怖くなって水の中でパニックになりかけたんですよ。必死に我慢してましたが、一緒に潜っていた上司に気付かれて「上がれ」と言われて……そのときはすごく落ち込んだりもしましたね。でもそこから潜れるようになって、なんとか35年続けてこられました。



水族館の生物は飼育員や地元の漁師さんなどが串本で採取。

黒潮の影響を受ける串本の海

串本って潮岬が出っ張っていて、東西に細長い町なんです。その沿岸域が串本の海で、だからよく言われるのは、潮岬より西側が亜熱帯の海で、黒潮が直接影響する海。逆に東側、つまり三重県側、熊野灘側が温帯の海です。一つの町に二つの海があるっていうのが、串本の海の特徴ですね。水族館のあるのが西側ですが、やっぱり黒潮の影響を強く受けるので、南からの生き物が多いですね。潮岬の西側と東側で水温も1度〜2度違いますから、こういう狭い場所です。これだけ差があるのは珍しいと思いますね。

串本の海には熱帯の生き物もいるし、温帯の



水族館の体験プログラムにて。串本の海の生き物に直接触れて生態を学ぶ。写真提供/串本海中公園水族館

生き物もいるので、魚の種類が多い。生き物の多様性が高いって言われていますね。日本近海の魚はだいたい4000種くらい確認されているんですけど、そのうち4分の1は串本で見ることが出来ます。

海に潜ると、西側の海はサンゴが多いんです。多く見られるのは、テーブルサンゴ、正式にはクシハダミドリイシと、枝サンゴ、正式にはスギノキミドリイシが混ざり合っている海中景観です。実は、串本の海の原因風景はクシハダミドリイシで、熱帯性のスギノキミドリイシは、1995年までは見つかってなかったんです。でも95年に初めて串本で見つかったからは、あちこちで見つかるようになりました。スギノキミドリイシは枝が上に成長するので、横にしか成長しないクシハダミドリイシより優占しやすいんですね。どんどんスギノキミドリイシが覆いかぶさって行って、今はかつてのテーブルサンゴ(クシハダミドリイシ)中心の海から、枝サンゴ(スギノキミドリイシ)が優勢になっている途中の状態ですね。

ただね、すべて枝サンゴに覆われるかと思っただけなんですけど、黒潮の蛇行があつてまただいぶ変わったんです。この辺って温暖化の影響もありますが、どっちかっていうと黒潮の影響のほうが大いレクトに強くて。黒潮が離れば水は冷たくなるし、黒潮が近くなれば暖かくなる。もちろん浅いところなんかは温暖化の影響を受けて海が暖かくなるということもあります。全体的には黒潮の影響のほうが強いと最近では報告が出ています。

は100以上あるんですけど、なかなかワールドに直結している水族館ってないと思いますね。海中公園という施設自体が、メインは外の串本の海にあるので、水族館はそのメインの海を知ってもらうための学習の場としてあります。だからやっぱり目の前の海に非常に重点を置いていて、お客さんにも目の前の海を体験してもらいたいっていうのはありますね。

私が館長になってから変わったこと……そうですね、もともとちはわりと研究に力を入れている水族館だったんです。もちろん研究も大事ですが、串本の海について広く多くの人にわかりやすい展示ができたらいいなと思いました。



「串本の海に興味を持ってもらいたい」と語る館長の森美枝さん。

「串本の海っていいね」って思ってもらえるような展示をして、もつとそれをアピールしたいなと思って。だから変わった生き物が入ったとかなにかトピックスがあれば、いろんなメディアにどんどん情報を出すようにして、興味を持ってもらおうと思いましたね。

場所が場所だけに、なかなか都会から来るのが難しいところがありますが、多くの人にこういう場所があると知ってもらうために普及活動は力を入れていきたいですね。やっぱり知らない人もまだ多いんですね。民営の水族館なので、研究だけではなかなか食べていけません。お金を稼がないと魚さんに餌もあげられないし(笑)。

最近は体験プログラムも人気が出てきているのですが、海の生き物を見るだけより、いろいろ体験したいとお客さんのニーズも変わってきてたんですね。飼育体験や飼育スタッフが磯の生き物を教える磯観察会といったプログラムも定期的にを行っています。

環境の保全活動や生態研究も続けていますが、まずは今ここにどんな生き物がいるのかを知ることが大事なのかなと思っています。地元の子供たちには、自分たちが住んでいる地域の海を受け継いでもらいたいですね。

ここに来たお客さんからは、「串本の海にこんなにたくさん生き物がいるとは知らなかった」と言ってもらえることが多いです。大事なのは、串本の海の生き物を紹介すること。このコンセプトは水族館がオープンした55年前からずっと変わりません。それをこれからも続けていきたいですね。

東側の海に行くと、サンゴはあまりなくて、海藻が多くなります。まあ近年、水温が高くなってきているので、海藻も少なくなっています。それでも西側に比べると多いですね。だから漁師さんも、昔からアワビとかサザエは、潮岬よりも東側のほうでとるんです。西側は海藻が少ないうから、アワビやサザエがあまりとれないということですね。

串本の海が豊かなのは、山の影響も大きいんです。山と川と海はつながっているんで、山から川へ豊かな栄養分が流れてきて、川を伝って、海へ注がれます。山と川がなければ豊かな海も存在しないので、この三つは非常に大事だと思います。串本のように山と海が近いと、山が傷んでしまうと海も同じように傷みます。たとえば山の木を伐採して土砂が流れてきたりすると、当然海も濁ってそこに住んでいるサンゴも死んでしまいます。非常に豊かな陸の自然があるからこそ、豊かな海の自然があるんです。

水族館を通して楽しく学ぶ串本の海と生き物

うちの水族館は串本の海にいる生き物だけを紹介していることが特徴で、水槽に入れる生き物は、実際に自分たちで海に潜って採集したり、地元の漁師さんから頂いています。ほかの水族館と生物交換をしたりするんですけど、串本で確認されていない生き物は、もっても展示はできないんです。

水槽には目の前の海の水を24時間入れっぱなし

て、太陽の光も当てて、自然に近い状態で生き物を飼っています。だから展示水槽に入れた魚はわりと長生きしますね。ここにあるサンゴは目の前の海からとってきて、もう15年くらいかな、ずっとそのまま自然にしています。ウミガメもたくさんいます。飼育してもう4世代目ですね。一番歳をとっている子は60歳くらいになっていると思います。

うちの場合、担当の水槽を決めたら、レイアウトや入れる生き物はすべて担当者任せです。やっぱり海からとらなければ中身が充実していない水槽になってしまいますから、本当に担当者の熱量が水槽に出ちゃう。だから毎日、なにかいないかと一生懸命潜って探しに行くんです。

水族館の目の前には素晴らしいワールドがあります。日本全国、水族館と名のつくところ



アカウミガメ、アオウミガメは水族館の目玉の一つ。

聞き書き
米本憲市さん、大和茂之さん

市民運動で守られる天神崎の自然 ナショナル・トラスト運動先駆けの地



平らな磯が続く和歌山県の天神崎。田辺湾の北側に突き出た岬であり、日本のナショナル・トラスト運動先駆けの地として知られています。ナショナル・トラスト運動とは、自然環境を開発などから守るために、市民が土地を買い取る運動のこと。1974年に発足した「天神崎の自然を大切にす会」は募金活動を行い、全国から寄せられた寄付で今も少しずつ土地を買い取っています。運動はどのように進んできたのか。その歩みを伺いました。

やまと・しげゆき／公益財団法人「天神崎の自然を大切にす会」業務執行理事。兵庫県明石市出身。愛媛大学で生物学を学んだのちに1989年に広島大学で博士号を取得。2021年まで京都大学フィールド科学教育研究センター瀬戸臨海実験所で助教として勤務する。2000年ごろからの観察会などで生物の案内を担当する。

こめもと・けんいち／公益財団法人「天神崎の自然を大切にす会」評議員。和歌山県田辺市出身。天神崎の近くで生まれ育つ。和歌山県立田辺高校に進学し、生物部の顧問であり後に公益財団法人「天神崎の自然を大切にす会」の業務執行理事となる玉井清夫（すみお）氏と出会う。1981年、生物の教員として田辺市に戻り、会の活動に参加。天神崎の保全や環境教育に取り組みつづけている。

森・磯・海市街地のすぐ近くに
豊かな自然がある稀有な場所

米本 僕が生まれたのがちょうど紀伊田辺駅の裏で、天神崎も含めて森や山に遊びに行っていました。1957年の生まれなので、当時は食い物もお菓子とかもなかったですから、自分たちで食い物を取ってきて食べるのが男の子供たちの遊びでしたね。

春には天神崎で貝をとって食べてました。貝はこの辺で磯物っていうんですけど、磯物には何種類かあって、一番食べたのはスガイです。割合簡単にとれるんです。茹でて、爪楊枝とかで身を取り出してね。

5月末には遊びがてら桜の木の下くらんぼをとって食べて、口を紫にして親に怒られたりね。6月にはヤマモモで、同じく怒られ。秋には椎の実を炒って食べて、中学生ぐらい



左・アラレタマキビ（会のシンボル） 右・オカヤドカリ（天然記念物）
天神崎の生物。熱帯～亜熱帯に分布するオカヤドカリは幼生が黒潮に乗って運ばれてくる。

になると冬場は鳥を捕まえるための罠を森に仕掛けて、ハゼの実なんかをパチンコにして、ヒヨドリを焼いて食べると。もちろん無許可だね（笑）。

天神崎の一番の特徴は、市街地から近いところに海と森があること。あと岩礁が平らやつとところね。子供が遠くに行っても見えるんで、安全に自然観察の活動ができる場所ですね。

大和 私は大学院を終えて、1990年に白浜に来たんですよ。田辺湾の南の端にある番所崎というところに京都大学の瀬戸臨海実験所があって、そこで海の生物を研究していたんです。

実は90年代までは天神崎の海っていうのはそんなにきれいな場所じゃなかったんです。田辺湾全体が汚くて、それ以前には当たり前な湾内にいた生き物がなくなっていました。だから私にとって天神崎はそんなに魅力的な場所ではなかったんです。それが2000年代、2010年ぐらいになってくると、田辺湾全体がきれいになってきた。

汚かったのはいろんな要因があるんですけど、一つは魚の養殖をやったこと。魚の養殖が悪いっていうんじゃないか、たとえば、網に付着生物が付かないように当時は有機スズの塗料を塗った。それはもう日本全国で有機スズの影響ってのはあったんですけど、田辺湾はわりと閉じられたところだから影響が大きくて、それで多くの生き物がなくなっただけなんです。90年代ぐらいまで

ういう影響を受けていたのが、少しずつ回復してきた。今も養殖自体はやってますが、うまく餌を管理するとか、環境に配慮するようになったということですね。

米本 生餌じゃなくてペレット状の餌をやるとか、陸上でプールを作って養殖したりね。家ごとに合併浄化槽ができて、海に下水を流さずに下水処理をするようになったし。

大和 水質を管理しようという機運が盛り上がってきたんですよ。そうすると、汚染されていなくなったいろんな生物が戻ってきて、生物相もだんだん回復してきた。田辺湾全体のことを考えるのがおもしろくなってきましたね。

今の田辺湾を見るとね、誰も海が汚かったとは思わないでしょうね。でも30年、40年前ってのは本当に汚かった。この間の激変した田辺湾の状態をたまたま私は目撃したという感じですね。田辺湾がきれいになったことで、天神崎が2015年に吉野熊野国立公園になるときにも、ごく自然に指定が決められましたね。

市民の募金で土地を買い取る

米本 僕は大学から、田辺を離れて沖繩に行きました。もうね、南のほうの生き物とか昆虫とか、そういうのに昔から憧れがあった。マングローブとかサンゴ礁、今でこそもう知らん人はあんまりいてないですけど、僕が高校生の頃にはそれらを知ってる人がほとんど



外山八郎氏（左）、玉井清夫氏（右）の写真が、会の事務所に飾られている。

いなかったんですね。そういうのを見てみたくて、やっぱりちっちゃい頃から、森の中とか磯で遊んでいたんで、生き物に対する興味があったんですね。それで沖繩の大学で生き物を研究して、理科の教員免許を取りました。戻るつもりはなかったんですけど、高校時代の生物部の顧問だった玉井清夫先生に田辺高校で教師をするよう頼まれたこともあって、戻ってきました。

玉井先生は、公益財団法人「天神崎の自然を大切にす会」で長く業務執行理事だった方です。田辺商業高校の教諭をしていた外山八郎先生が会を作って、玉井先生もずっと一緒に活動されていきました。この会というのは、1974年に開発業者が天神崎に別荘地を作ろうとしたことがきっかけでできたんです。外山先生がそのことを同僚の先生から聞いて、すぐその足で、「天神崎の自然を大切にす会」を作って保全のために動きはじめました。



40年先の付き合いになる大和さん(左)と米本さん(右)。

どうして外山先生がすぐに動いたのかというと、外山先生は教育相談の先駆けというか、学校でカウンセリングを始めた先生なんです。ただ、カウンセリングをするにも、教室や職員室だと生徒にしゃべってもらえない。その高校は、すぐ前が海で浜辺があつて、そこに行つてね、生徒としゃべるとすごくいい。そんなことを話してくれたそうです。でもその大事な砂浜を、道路を作るために埋め立てるっていう計画が1973年に出て、先生と生徒会が声をあげて反対したんだけど、もう計画に許可も下りて予算もついていると。今更あかんということで、計画変更はできなかった。一度そういうことがあったもんやから、情報を得たらすぐに、決定される前に始

めないと手遅れになるということを経験してんです。外山先生は、カウンセラーとして話を聞く場の大切さをすごく感じてたんですね。それで自然の保全も大事なやつっていう、そういうことを考えてたんだと思います。会ができたころ、僕は高校2、3年生で、当時はそういう動きがあつたことをまったく知りませんでした。あとから聞いたことですが、会ではまず県や市に対して、開発業者に許可を与えようとしてくれという署名活動をしました。でも法律に則った開発だから不許可にできないと。天神崎は県立自然公園に指定されてたんですけど、そんなに規制が厳しくなくて、建ぺい率を守れば建物は建てられたんです。それで行政のほうから、あなた方で土地を買い取って業者に開発をやめてもらうしかないんじゃないかと言われた。たぶん、そんなことできるとは行政の担当者も思つてなかつたと思うけど。

外山先生はそれでも天神崎の自然を残したいつてことで、まず熱意表明募金という募金活動を始めたんですね。土地を買い取るための募金じゃなくて、残してほしいという熱意があるんだと、そういうことを示す募金です。でもそれだけではなかなかね……。会のなかでは「もうここまで頑張つたから、開発はしゃあないんじゃないか」という意見も出た。でも外山先生たちはなんとかして募金を集めたいと。だから新たに募金を受け付ける受け皿として「天神崎保全市民協議会」という別の団体を作つたんです。



1975年から続いている自然観察会。写真提供/天神崎の自然を大切にする会

募金を一般に募るといっても、まず知ってもらわないといけない。今と違って個人が発信できない時代やから、そうするともう、新聞とかテレビ、ラジオに頼るしかないんですけど、一民間団体に協力してくれる報道関係者っていうのは、なかなかない。結局、1976年に募金ではなく、外山先生のお兄さんがほんの一部の土地を業者から買い取つたんですけど、当時はもちろん法人格じゃないから、個人名義にするしかなかった。それが第1号の買い取りでした。

僕が外山先生と出会つたのは、教師として田辺に戻つてきた1981年、赴任した田辺

高校の生物教室でした。玉井先生に相談に来た外山先生が、そこで昼飯を食べていて。当時、外山先生はもう教員を辞められていたけれど、奥さん手作りのパンとね、家で飼つてるヤギのお乳をトリスウイスキーの瓶に入れて持つてこられてたね。それで外山先生から天神崎の話をいろいろと聞いて、自然観察教室の担当をしてくれないかと言われて「はいはい」と特に深く考えずにね、返事をして。それで会に参加するようになったんです。そのころにはある程度募金が集まっていたかな。新聞に会の活動が載つて、それが一番大きかつたと思います。一度、個人的に買い取つたことで業者もちゃんと買い取つてもらえるんやろうって信頼関係みたいなものもできていました。

そのあと買い取つた土地や寄付金をいつまでも個人名義というわけにはいかんから財団法人を作ろうということになり、天神崎保全市民協議会を解散して、財団法人天神崎の自然を大切にする会になつたんです。天神崎はナショナル・トラスト運動の先駆けと言われるけど、当時は誰もナショナル・トラスト運動のことは知らなかつたんです。私らの進め方で進んできたつていうことですね。

寄付は県外からしてくれた人も結構多かつたですね。県外にいる田辺出身、和歌山県出身の人も多かつたけど、一度も田辺に来たことのない人からも寄付をもらうこともあつたね。

大和 私はもともと天神崎の運動のことは、



引き潮のときに見られる、ウユニ塩湖のような景色。写真提供/天神崎の自然を大切にする会

じゃあ天神崎のことに関わらんかつていう話があつた。その少し前に玉井さんがね、天神崎の裏山に登つて田辺湾の場所を順番に説明するんですよ。田辺湾には神島という小島があつて、南方熊楠が保全に努力した島である。それから京都大学の研究施設になつている島島という島もある。その二つの島と、さらにその先には私の働いていた瀬戸臨海実験所がある番所崎がある。天神崎の運動は田辺湾全体のことを考えているんだよと説明されました。会には昔から付き合いのある米本さんがいたこともあつて、天神崎の活動に関わるようになった。海の生物の観察会するときには、できるだけ参加するようにしましたね。

自然をそのまま残す意義

米本 我々の理念つていうのは、一つ目は自然保護なんですけど、その保護した自然を利用して子供たちの教育に使いたいというのがね、大きな二つ目の柱です。当時の自然観察会は、初心者向けというか、初めて海に来る人なんかをイメージしながらやりました。専門的な説明もすることはするんですけど、楽しんでもらうっていうのが主眼でした。

大和 陸の生物だとね、ちよつと身の回りを眺めれば自然と見る機会がありますが、海の生物は海に行つて見ようとしなければ出合えないんです。実際にそこに行つて海の生物を自分で感じてもらうっていうのは、天神崎の活動にとつて大事なものだと思ひます。

米本 今も会では寄付による買い取りを続けていて、現状は保全目標面積の半分を超えたくらい。もしこの運動がなかつたら、別荘地としていつた人家は建つんでしようけど、空き地や廃屋がある状態にたぶんなつてたでしょうね。開発されると土砂が海に流れてくるんで、その影響も出てくるよね。

大和 天神崎のような平らな岩礁の海は潰そうと思えば簡単に潰せるんですよ。コンクリートで堤防を作つたり、埋め立てたりするのは、それはもうやろうと思えば簡単にできてしまう。だけど、小さな場所だけでも、自然のまま残してくれたから、いろんな形でみんなが自然を楽しむことができると思うんです。

米本 天神崎がウユニ塩湖みたいだつて。この何年かで写真を撮るためにたくさん人が来るようになってきました。これは思ひがけないというか(笑)。

大和 私たちは誰も知らなかつたんですけどね。会以外の人が天神崎にそういう魅力があるつていうのを見つけてくれた。それも、場所がそのまま残つていたからだと思ひます。これからも今のまま残つてほしい。

米本 今後の目標としては、まずは買い取りを完了させることですね。それで天神崎をそのままの状態を手を加えず、会を継続して続けていければいいかな。あとは若い人たちに天神崎の運動の経緯を知ってもらつてつないでいくことですね。これから若い人たちの手助けが必要だと思ひます。



磯では満潮時に釣りをする人も。干潮時には21ヘクタールもの干潟が広がり、灯塔のある丸山まで陸でつながる。写真提供/天神崎の自然を大切にする会

聞き書き
高木亮英さん

途絶えていた熊野修験を再興 山岳信仰の舞台で修験の精神を伝える



深く険しい那智の山々は、1300年以上の歴史がある修験道の修行の場。那智の滝をはじめ滝が点在する原生林では、古くから山伏たちが厳しい修行を重ねてきました。また、熊野那智山は、平安後期以降、貴族から庶民にまで広まり大ブームとなった熊野詣の参詣地の一つでもあります。この場所に生まれ育った青岸渡寺の住職は、明治政府が廃止したことで途絶えていた熊野修験を再興。自然とともにある熊野信仰の精神を伝えつづけています。

たかぎ・りょうえい／那智山青岸渡寺住職。1949年、先々代住職の4男として生まれる。比叡山高校への進学で熊野を離れ、龍谷大学法学部を1972年に卒業。青岸渡寺に戻ったのち、熊野修験の再興に取り組む。1988年には大峯奥駈(おおみねおくがけ)修行を、1992年には那智四十八滝の所在を特定し那智四十八滝回峰行(かいほうぎょう)を復活。2023年、修験道の創始者である役行者(えんのぎょうじや)の像を祭る熊野修験那智山行者堂を150年ぶりに再建した。熊野修験の精神を発信しつづけている。

あらゆる人を受け入れる 聖地霊場としての熊野

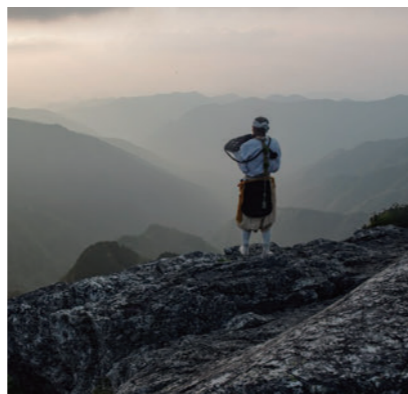
熊野那智山には那智四十八滝といつて、48のお滝があります。この青岸渡寺から見える「那智の大瀧」が一の滝で、青岸渡寺の隣の熊野那智大社の別宮の御神体です。那智山の信仰は、那智のお滝が根本。逆にお滝がなかったら、那智山には青岸渡寺も熊野那智大社もなかったと思いますし、今日みなさんにお目にかかることもなかったかと思えます。

一の滝の奥には二の滝、三の滝があるんですけど、清流で水がきれいだね。今は神域で一般の方には開放されていないんですけど、私が幼少の頃は自由に行けました。友達と一緒にね、水浴びをしたり、小学2〜3年生くらいになるとけもの道をよじ登って二の滝、三の滝まで行って魚釣りをしたり。ハエ(カワムツ)とかヤマ

メとかアミノウオ(アマゴ)、そんなが釣れました。幼少期からお山に親しみ、この那智の自然とともに70年間歩んできたと言っても過言じゃないかと思えます。キザな言葉で言うたら、那智の大瀧で産湯に浸かって、那智の大瀧を日々見ながら、そしてまた手を合わせながら、今日に至っているというかね。ただ、子供の頃はここが歴史のある場所という感覚はないですよ。逆に遊び場。大きくなるにつれて奥深さというかね、そういうのがわかってきたというかね。

ご承知のように、熊野は2004年に世界遺産に登録されたわけですよ。昔から熊野の信仰というのは、ほんまに類いまれなる熊野の大自然の中に神が鎮まり、仏が祭られたという、大自然抜きにしては語れない聖地霊場です。いろんな宗教がミックスされて形成されているのが特色で、神道、仏教、陰陽道、修験道、あらゆる宗教が混在しているわけです。この那智山も明治政府による神仏分離令が出るまで、青岸渡寺と熊野那智大社が一体としてあった。これは非常に大事なことでね、認め合うということ、寛容の精神が熊野には備わっているかと思えます。

もう一つ、熊野は非常に開放的いうんですか、昔は比叡山も高野山も女人禁制で、女性は登れなかったんです。けれどこの熊野に至っては、不信を選ばず、浄不浄を嫌わず」と言っています。天皇、武士、庶民と、ありとあらゆる方々を受け入れ、女性も自由にお参りができました。人間というのはすべて平等です。今では世界



修験者の装束で、大峯奥駈道の厳しい自然の中で修行をする。写真提供／那智山青岸渡寺

各国から熊野に来られますけれども、人種がかわれども国が変われども、あらゆる方々を排除することなく受け入れる、そういう度量いうか、寛容の精神があるわけです。

また、ここは本州最南端、辺境の地でもあります。今でこそみなさん、飛行機や新幹線、車で熊野に来られますけれども、昔は歩いての路であり、人々が道に迷うことなくお参りできたのはなぜかと申しますと、そこに熊野の山伏が介在したわけなんです。山伏とは山に分け入って修行を実践する修験道の行者のことです。山伏が全国からお参りに来る人の道案内をしていたんです。

熊野詣の全盛期には、参拝者の宿泊施設である宿坊が36坊ありました。参拝者の身分証明書今でいうクーボン券みたいなものがあり、薩摩の住人はこの宿坊に泊まりなさい、陸奥の住人はこの宿坊というように協定がね、なされていたわけです。山伏はそれに基づいて宿坊を手配して道案内をします。まさしく今の観光業の原

点ともいうべきことを700〜800年前にね、やっていたわけなんです。

「蟻の熊野詣」という言葉がありますが、当時は熊野に参詣する人が蟻の行列のように切れ間なく続いていた。こうした熊野の知恵が、蟻の熊野詣のもとを成したわけなんです。

父の想いを受け継いで 熊野修験を再興

修験道について触れさせていただきますと、山を歩くことがメインの修行でして、まさに吉野熊野国立公園の中心部、大峰山脈を修行の場所として1300年来続いています。山に分け入って修行を実践することによって霊験、パワーを頂いて人々を救済するのが本分でございます。大自然が修行の道場であり、山の一本一草に神や仏が宿り、それを感謝し拝みたまつるというわけですね。

ご承知のように1868年(明治元年)に政府から神仏分離令が発令され、その延長線上で1872年に修験道廃止令というおふれが出て、熊野の修験が途絶えました。

私は高校、大学と7年間この地を離れて、また戻ってきたのですが、戻ってから那智勝浦町の町史編纂委員会という歴史を研究する会に入られました。そこで修験道を研究されていた郷土史家の先生に、この地が修験道の霊場で、特に日本第一霊験所として修験者の根本道場であったゆうことを教えられてね。それで修験に関わる知識を授けていただいたんです。



那智山青岸渡寺の本堂。

修験道を復活させようと実行に移したのは、1987年に父親が亡くなったことがきっかけでした。遺品を整理したら、タンスから鈴懸とか袈裟とか修験道の装束一式が出てまいりました。父親はもと名古屋出身でね、16歳のときにこのお山に來まして、那智山で70年近くを過ごし亡くなったわけですけども、その間はお堂を建てたり伽藍の整備したり、廃仏毀釈で荒廃した青岸渡寺のハード面を再興して一生を終えられた。修験道というソフト面までは手をつけられなかったんですね。父が用意していた装束を見ると、1872年に途絶えた熊野修験をなんとか復興させたいという思いが、ひしひしと感じられるわけです。胸に突き刺さるというかね。それで父が亡くなった翌年から、熊野修験を再興するために山を歩き始めたわけです。



「自然を守ることが使命」と穏やかに話す高木亮英さん。

熊野の修験道には大峯奥駈修行というものがあります。吉野山と熊野を結ぶ山の中を歩く修行です。地理的なことを申しますと、海抜

350メートルほどのこの場所から大峯山脈の主峰である1915メートルの八経ヶ岳の頂を越えてね、吉野まで行くわけです。八経ヶ岳は近畿でも一番高い山ですから、道のりは非常に厳しく、歩き通すのに1週間かかります。

この大峯奥駈修行を復活させようと考えたわけですが、最初は道もなにもわかりません。けれど「新宮山彦ぐるーぶ」という登山愛好家の方々が、私たちの10年くらい前から修験の道として大峯奥駈道を再興する活動をしていまして、この方々に導かれていきました。最初は草木が生い茂り、木をかき分け山の中を進みましたが、山彦ぐるーぶの方々が山小屋を建ててくださったり、草刈りをして山の道を整備してくれてね。そのお力添えによって、歩けるようになったわけです。

我々是一般の方も交えて大峯奥駈道を歩く現代の奥駈を続けています。もう40年近くになりますかね。最初は我々3人くらいでしたが徐々に人が増えてきてね、世界遺産に登録されたときには、200人ぐらい引き連れて歩いたこともございます。

先ほど申しましたように熊野は非常にオープンで、多くの方々を受け入れるスピリッツがある。修験道の世界を感じてもらえるように来る方は拒まずということで、一般の方々もともに歩いているわけです。ただ、なかなか1週間も仕事を休んで歩きつづけるのも難しいでしょうから、春と秋で分けましてね、「春の峰入り」「秋の峰入り」で通算1週間として歩き切るわけです。最初は信心がなかった人も、ともに歩くな

かで、我々の姿を見てお経を一つひとつ覚えていたり、自然に手を合わすようになっていたりね。それが人々に感謝する思いにつながっていただけだと思います。

山彦ぐるーぶの方々は我々の行動を応援してくれて、今も峰入りの際には握り飯をこしらえてくれたり煮炊きをしてくれたり、参加した行者さんを支えるサポートをしていたりしています。熊野大峯奥駈の再興は、我々だけで達成したわけではありません。そういうボランティアの方々のおかげで行を続けることができたわけです。

1992年には、途絶えていた那智四十八滝回峰行という修行も再興しました。毎年1月の小寒から大寒にかけて、修験者で四十八滝を回る寒行です。非常に寒いときですわ。そのときに50分ぐらい滝の水に浸かってね、もう寒いどころではない。痛いというか、だんだんその感覚もなくなると、無感覚というか、水が体の中を通るような感じになるんです。水から上がったときはもう、非常に怖い。ガタガタ震えて、



青岸渡寺の三重塔と、一段滝では日本一の落差を誇る那智の滝。

手もかじかんで動きません。生きるか死ぬかの瀬戸際いうくらいでね。それでまた次の滝、また次の滝と、四十八滝を回る。そういう修行も30年近くやってきました。

なぜ山に分け入りこのように厳しい修行をするかというと、「擬死再生」ができるからです。我々はけがれた、非常に悩み多い世界にいるけれども、山に入って厳しい修行をすることで非常にビュアな気持ちで生まれ変わることができると。思いやりの心、優しさの心、慈しみの心を再生させる。山での修行は人間再生に通ずるところがあるのです。

人間の安らぎがある 熊野の大自然を守る

国立公園にはそれぞれの地域の特性があるかと思えますけど、我々からすると、山岳信仰の根本道場であり、再生につながる地が吉野熊野国立公園であるかと思われます。那智山は人々のよみがえりの地であるとも言われています。

でも、それはお参りすることで生まれ変わる事ができるということ。よみがえりの地の精神に触れようと今も世界中から熊野を目指して来られているわけです。仏教はインドから起こって中国、韓国を経て日本に來たわけですが、日本の宗教の原点は、やはり大自然、アニミズムが根底にある。自然に対する感謝の思いがあるわけです。そして今でも田舎に行けば家には神棚があれば仏壇もある。神社の隣にはお寺さんがあり、どちらにもお参りする。日本人の心の中には神仏が同居しているんですかね、そういう寛容さがあるんですね。150年前に明治政府によって神仏分離、廃仏毀釈が行われましたけども、仏像や建物を壊したり焼いたりすることはできても、日本人の心までを破壊し尽くすことはできないわけです。

ちょっと話が飛躍しますが、今ヨーロッパなんかを見ればね、戦争の根底には宗教の対立があると思います。「我々の宗教が一番素晴らしい」と固執するのではなく、あらゆる人類、人種があるがごとく、あらゆる宗教があつてしかるべきで、それを認め合うのが大事なことでね。熊野に至ってはあらゆる宗教が混在しています。あらゆる人々の幸せを願うのが宗教であるわけで、ぜひ世界の人に熊野に來て、それを感じてもらいたいと思います。

人には煩惱があり、どうしても自分さえ良ければ良いと、自分に執着します。それによって、人間本来の思いやりの心が廃れていってしまいます。けれど山に行けばそういうこともござい

ません。青空を見て緑を見て、オオヤシオ（アカヤシオ）やシロヤシオを見れば心が安らぎ和むわけです。那智の大瀧を見て逆上する人は誰もいません（笑）。ヨーロッパ人であれ、中国人であれ、ここに來たら皆スマホでね、この景色を撮っております。私から言わせてもらおうと、自然には目に見えない靈験、靈気があるかと思えます。自然の雄大さに癒される、人間の安らぎが熊野の大自然に備わっています。だから自然というのは、もうほんまに大事。いかにこれから守り、残し、共生していくかということとは全人類に課せられた課題かと思えます。

修験道の原点である自然が、国立公園として法によって守られている。それはまた非常にありがたいことです。吉野熊野国立公園は90年を迎え、また100年、200年、1000年とね、守っていくのが我々の義務というか、務めかと思っています。



青岸渡寺から大峯奥駈道に続く道。徐々に道は険しくなっていく。



2023年に再建された行者堂の床下には、大峯奥駈修行に使った草履が吊るされていた。

編集後記

本誌「山、川、海 巡る水が運ぶ生命と文化」の取材で特に気をもんだのが「雨」でした。天気予報は、5日間の取材期間のうち3日以上が雨。最終日に至っては台風の影響により大雨マークが表示されている。さらに今回取材したみなさんは笑いながら自分が雨男、雨女だと言う。そのようななかでも、みなさん共通して発していたのが、「この雨もこの地域らしい」という言葉。雨に対してなんてポジティブなんだと気持ちが悪くなったと同時に、改めてこの場所が多雨地域であり、地域の人々にとって雨が身近な存在であることを実感しました。

今回取材したこの6組のみなさんは、山、川、海、それぞれ異なったエリアで活動していますが、取材してみても、みなさんの活動には、「次につなぐ」という共通点があることに気がつきました。

吉野の伊藤さん、山口さん、奥西さんは森を守り次世代につなぎ、大杉谷の大西さんは子供たちに自然の楽しみ方を伝えつなぐ。熊野川の谷上さんは川舟文化をアクティビティとして復活させ、移住してきた北原さんはその川舟文化を受け継ぐ。水族館の森館長は串本の海を知ってもらう活動によって地域の人々と海をつなぎ、天神崎の米本さんと大和さんは土地を購入し、遊ぶ場所としての干潟や森

を守りつなぐ。そして、那智の高木住職は、途絶えていた熊野修験を再興し、この地の信仰と文化を国内や世界に伝えつなぐ。みなさんの活動の根底には、自分たちの地域の自然を大切に思い、畏敬の念を抱き、この自然や文化を知ることこそ守ることにつながるという思いがありました。活動場所も活動内容も人それぞれ違いますが、みなさんが見ている未来は同じで、一つにつながっていることを強く感じました。

この吉野熊野国立公園は2026年に90周年を迎えます。歴史が長く、エリアも広いので、公園内に暮らす人々が接する自然もその自然に対する思いも人それぞれ異なります。だからこそ、「人ひとり」が自分たちの住んでいる地域に目を向け、自分たちの意思で守り、つないでいくことは、国立公園を引き継いでいくうえでとても重要だと思います。本誌を通じて、この地域を今後もつないでいきたいという思いがさらに広がることを願います。

株式会社オールアバウト

吉野熊野国立公園

山、川、海

巡る水が運ぶ生命と文化

国立公園ものがたり

発行月 …………… 2026年3月第1刷発行

発行元 ……………

環境省自然環境局国立公園課国立公園利用推進室
東京都千代田区霞が関1-2-2 中央合同庁舎5号館

TEL 03-5552-1827

TEL 03-5552-1827

<https://www.env.go.jp/nature/nationalparks/>

企画・編集元 ……………

株式会社オールアバウト

東京都渋谷区恵比寿南1-15-1

A PLACE恵比寿南3F

<https://corp.allabout.co.jp/>

全体管理 ……………

土居里佳

編集主幹 ……………

土居里佳

デザイン進行 ……………

吉田拓実（一般社団法人ドット道東）

アートディレクション ……………

名塚ちひろ（一般社団法人ドット道東）

デザイン監修 ……………

鈴木美里

デザイン ……………

青砥美穂子（Bluepine）

執筆 ……………

村上三千雄（VILLAGROUP）

撮影 ……………

梅田梓

イラスト ……………

中嶋真也

校正 ……………

井上愛美（Casoc社合同会社）

写真提供 ……………

天川佳代子

吉野山保勝会

大杉谷自然学校

串本海中公園水族館

天神崎の自然を大切に作る会

那智山青岸渡寺



近
畿